

血と雫 *je prie pour que la goutte ne tombe pas* interview



森川誠一郎 (Vo) 山際英樹 (G) 高橋幾郎 (Ds) 3人によって結成され、“日本のロック・バンド”というスタンスを掲げ、始動した“血と雫”が1stアルバムをリリースした。Z.O.A、YBO2、割礼、コクシネル、不失者など、日本のロック史における重要バンドで活動してきたメンバーが、鬼気迫る緊張感でぶつかり合い生み出した音は、シンプルながらも、深遠で示唆に富み、“歌”を基軸に、聴くものの感情を強く揺さぶる。バンドの結成の経緯、その理念について、森川と山際の二人が語ってくれた。

November 9, 2012 / text : 川上啓之

—00年にZ.O.Aのアルバム『仮想の人=The moon said that you are the moon』、02年に森川さんのソロ・アルバム『空蝉 utsu semi』がリリースされ、今回の血と雫のアルバムは、森川さんの活動の中では、約10年ぶりの作品となるわけですね。森川さんは近年はセッション的な活動も多くやっていますが、血と雫は、ユニット的な捉え方なのでしょうか？

森川：これはバンドです。バンド名を付ける前提でレコーディングをしていますから。

—では、“バンドを結成する”に至った経緯を教えてくださいませんか？

森川：元々は山際さんとは何回かセッション・ライブはやっていて、何回目かのライブに声をかけてもらった時に、僕が、“今回は朗読ではなく歌をうたう”と考えた。それが、この血と雫の大本になってるんです。

山際：その時にやった曲も、今のレパートリーになってる。

森川：それまでの二人のセッションでは、一切、歌ってなくて、すべて朗読だった。

—能や朗唱にもアプローチしていたとのことですが？

森川：元々、ソロを出す前に、自分で書いた詩を朗読する形でセッションをやっていたんですけど、能に関しては、古館（徹夫/海外の現代音楽シーンでも高い評価を得ているサウンド・アーティスト）さんから“ドイツのラジオ放送向けの録音があるから、テキストを読まないか？”って話に来て、そこからですね。その時に共演したのが能の演奏家の人たちだった。朗唱に関しては、朗読とは違って、ある程度、節が決まっているんです。自分の中のルールに沿って、詩に節を付けて読むという形でいえば、より音楽的です。

—そういった活動を経て、“歌をうたう”というアプローチを採ることになったのは？

森川：歌をうたう。メロディ・フレーズを歌うということに関しては、自ら避けていた部分だったんです。そもそも、Z.O.Aも、そういうバンドではなかったし。でも、山際さんとやることになって、“うたってみようかな”ってことに。

一では、山際さんとの出会いが、血と雫での“歌をうたう”という表現に対して重要だったんですね。

山際：ある時、ふと“歌いたい”って言い出したんだよね。

森川：漠然とだけけど…。

一山際さんのギターに触発されたところもあった？

森川：そうだと思います。他にもギタリストと何度かセッションをやってるんですけど、“歌（メロディ）をうたう”という表現には至らなかった。そもそも、一般的な歌手としての自覚も無いし上手くも無いですし。

一そして、ドラムの高橋さんとの出会いに関しては？

森川：『空蝉』を出す前の00年頃に、一時期、札幌に住んでたんですけど、そこで知り合って。でも、一緒に演奏する機会はないまま、意識はしてたんですけど、初めて演奏したのが、北村（北村昌士/YBO 2、Canis Lupus etc.。06年に逝去）さんの追悼ライブ（06年）の時。Z.O.Aでの出演は出来なかったし、どういう形でやったらいいか、すごく悩んだんです。今まで自分のポリシーとして、一人で演奏しないというのがあって、誰かとやることによって、そこで生まれるものを見たいというのがあるので、誰とやるのかとすごく悩みました。そこで幾郎さんに声をかけてみたのが最初です。その時の演奏で自分の中に刺さってくるような強烈な印象があって、“次に、もしバンドをやる機会があれば、絶対に幾郎さんのドラム。”と考えていた。

一山際さんは高橋さんとの面識はあったんですか？

山際：対バンしたのが初めて、シェイズとか、灰野敬二さんのバンドとか。

一高橋さんは北海道在住ということですが、そういう距離的な制約がある中でも、血と雫というバンドを、敢えて、この3人でやろうとしたのは？

森川：活動形態として、僕がバンドという形で活動をしたいと思うがゆえに、その為のメンバーを探すというのではなくて、“この人とだったら、バンドを作って活動をしたい”っていうところが強いんですよ。だから、“誰がどこに居る”とか、“誰が他にどういう活動をしている”というのは、全く関係がなくて。“演りたい人と演れている”。楽曲に関しても、“こういう風にしてほしい”というのは、ほとんどない。皆、自然にやっている感じですね。それは凄いと思います。

一具体的な曲作りの進め方というのは？

山際：作曲は二人（山際、森川）で作ってるんですけど、あとはカバー曲のアレンジは僕がやってます。

森川：今回は、僕はヴォーカリストに徹していて、楽器を持ってないんですけど、それも理想でした。ギターに関して、フレーズを提示することもなく、山際さんに歌詞と歌のメロディを渡して、それをアレンジしてもらい、曲に昇華してもらうという感じですね。

一高橋さんとのコミュニケーションに関しては？

山際：なかなか二人とも喋らないから、スタジオで音を出してやるしかないですね。それ以前に、べつに喋らなくても、気が合うというか。音がバシッと合った時の気持ちよさがある。

一山際さんは、ギターでのバックアップとソロ的な部分をひとりで担うことになるわけですが？

山際：ライブではループを使ってるので、ソロが必要な時には、ループの上にソロを重ねる感じでやってます。

一曲によってはイレギュラー・チューニングも使ってますが、ギターひとりでの音域を広げるというような意識もあるんでしょうか？

山際：ドロップDチューニングを使ってるんですけど、それは20年くらい前からバンドの中でもやってきたことなんです。デルタ・ブルースとかを参考にして、低音の動きとかを採り入れてますかね。

—今回のアルバムも、ある意味、“ブルース”とも捉えられるような、重さや深みを感じられますね。表現は難しいですが、“死の香り”というようなものを、どうしても意識してしまうような…。

森川：バンドを組むというのは、Z.O.A以来のことなので、そういう面では、並々ならぬ決意でやっているの、全精力を傾けているが故に、それと同等の“死”の部分が漂っているというか（笑）。

—Z.O.Aの頃からのファンは、もっとZ.O.A的なものを求めることもあるんじゃないかと思うんですが、それはもう封印されてしまうんでしょうか？

森川：Z.O.A後期でも、だいぶイメージは変わってたんですけど、そこからソロ活動を10年くらいやってきて、今に至る過程で、それをやるための能力ってのは、自分の中の違うところの引き出しにあって、それを引っ張ってきてやるのではなくて、今開いている引き出しから作り出したいというのがあるから。